

G-6 家庭科教育内容に関する研究 I
広島・東京・岩手の3都県における家庭内被
服製作の実態調査 (第1報)

岩手大教育 ○清水 房
広島大教育 石渡すみ江
都立立川短大 大山サカエ

1. 昭和30年代のめまぐるしい技術革新の影響をうけてきた現在の家庭生活において、被服製作技術が日常どのようなかたちで行なわれているかを把握する目的で、調査研究を実施し、第1報としては、(1) 調査対象者の家庭について、(2) 裁縫を主とする人について、(3) 年間月別自家製作品別数量について、その実態を報告する。

2. 調査時期は、昭和42年11月に実施。(3)については、昭和41年11月から42年10月までの1年間を区切って調査した。

調査対象は、広島・東京・岩手の3都県の女子高校生の家庭500世帯を目標とし、調査用紙は各都県600枚ずつ、1800枚を配布した。記入者は、家庭内における裁縫を主とする者を原則とした。

3. (1) については、全国平均4.05人より1.29人多い結果となり、家の職業には、3都県の性格があらわれている。(2) については、年代別による職業の有無・最終学歴・役立った技能習得機関を考察し、特に技能習得機関と最終学歴との関係について、つぎのような結果が得られた。義務教育卒は、家庭→塾→学校の順に、より高い学歴の者は、塾→学校→家庭の順位となる。(3) については、地域ごとの特色が一部にみられ、広島と東京はほぼ類似した動きを示しているが、約50%が農家によって占められている岩手の場合は、季節的変動において、他の2地域とはちがった特色があらわれている。